

保健体育科における教育実習のありかたに関する研究(Ⅰ)

—教育実習生の実態からみた改革の方向性の検討—

西村 清巳 松岡 重信 梶原 久巳
房前 浩二 岡本 昌規 三宅 幸信
高田 学峰 宇田 光代 藤原 宏美

Ⅰ. 本研究の目的

現代社会には、多種多様な価値観が存在するとともに、国際化・情報化などの大きな波が押し寄せている。また、環境問題・高齢化社会の問題等の、早急に解決すべき多くの問題が山積している。これらの問題に対しては、従来のような固定的な観念や一元的な価値観で対処することは到底できるものではない。来るべき21世紀は、このように複雑で変化の激しい不確実性の時代だと言われており、この変化に対応できる柔軟で多面的な発想力が必要とされているのである。

はたして、未来を生きる子どもたちを育てるためには、彼らにどんな力をつけたらよいのであろうか。また、その育成にかかわる教師には、どんな資質や能力が求められているのであろうか。

我が校では、従来「主体的に未来を切り拓くことのできる力」の育成を目指した教育実践と研究を、大学との共同研究のもとに積み重ね、一定の成果を得ている。そしてその中で、我々教師自身の在り方を常に自らに問い続けることの重要性を痛切に感じてきた。望まれる生徒像と、それにかかわる教育の在り方を考えるときには、教師のありようを抜きにしては考えられない。このような教育の在り方を示す一つの答えとして、くしくも中教審答申では、「ゆとり」の中で、子どもたちに「生きる力」を育てていくことが基本である。」とし、「いかに社会が変化しようとも、子どもたちが自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質や能力を身につけ、また、自らを律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心など、豊かな人間性を身につけることが必要である。」とうたっている。さらに、そのような教育を実現するためには、教育にかかわる教師のありようもまた検討されなけれ

ばならないという観点から、教職員養成審議会答申では、「『生きる力』の育成には、教師の資質能力の向上が前提である。」とし、「教育実習の延長」、「教育相談」、「総合演習」などの教職科目を拡充するなどの改善が必要であると述べている。また、今後の教員の資質能力の在り方としては、全教員に共通に求められる基礎的・基本的な資質能力はもちろん、積極的に各人の得意分野づくりや個性の伸長をはかり、さらにこれらの多様な資質能力をもつ個性豊かな人材によって構成される教員集団が連携・協働することにより、学校という組織全体として充実した教育活動を展開すべきだと提言し、これからの教師像の一端を述べている。そして、中学校の教員養成を中心に教育実習を見直すことが、具体的に動き始めたのである。

永年、附属校の使命として教育実習生を指導してきた我が校としても、以前のように「教師になろう」という強い意欲をもった実習生が減少してきたことに伴い、近年の実習生の実態に、ある種のもの足りなさを感じる人が多い。それは、他の何よりも、子どもたちにとって不幸なことであり、なんとか打開しなければならぬことである。

本研究においては、このような社会的課題となっている問題を解決するための方向性を見いだすために、

- ①未来の教師を目指す実習生のためにどのような教育実習をおこなうべきか。
- ②大学でどのようなことを学んでおけばよいのか。という点を明らかにすることを目的とし、今後の教育実習を考える糸口としたい。

Kiyomi Nishimura, Shigenobu Matsuoka, Hisami Kajiwara, Kohji Fusamae, Masaki Okamoto, Yukinobu Miyake, Manabu Takata, Mitsuyo Uda, and Hiromi Fujihara: A Study on What Student Teaching Should be in Health and Physical Education(1)

II. 研究方法

1) 調査対象

広島大学教育学部教科教育学科体育教育学専修
後期教育実習生28名(男子18名, 女子10名)

2) 研究の手順

教育実習の事前と事後のアンケート調査から, 次の

点を明らかにしたい。

- 1) 実習生が大学に期待していたものは何か。
- 2) 教師のための基礎能力はどのようなものと考えているのか, それは十分に準備できていたか。
- 3) 学校教育についての認識はどのようなものか。
- 4) 実習を通して何を考え, 実習自体をどのように評価しているか。

III. アンケート結果

資料1

I. 大学に期待したもの

①教職に就くことを期待して, 大学に入学しましたか?

した	5	4	3	2	1	しない
人数	7	8	3	4	3	人数

②今の教育学部に満足していますか?

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	6	13	6	0	人数

③どんな点に満足していますか?

- ・実技, 実習の授業が多い
- ・指導教官がとてもよくしてくれる
- ・専門の教科の知識を十分に得ることができる
- ・自分の興味のある授業がある
- ・免許を取る場合のカリキュラムが無理なく組める。多種目の実技が選択できる
- ・学習環境が整っている
- ・運動全般の知識や技術などを修得できる
- ・授業の内容が幅広いところ
- ・少数で授業が行えるので理解しやすい。質問もしやすい

④どんな点が不満ですか?

- ・教師になるための指導ができていない (教員採用対策など)
- ・附属が近くにない
- ・教師の一方的な講義が多く学生とのコミュニケーションが少ない
- ・もっとコンピューターなどで情報を取り入れた方がよい
- ・故郷に帰って教育実習をしたい

資料2

III. 学校教育についての認識について

①校務分掌にはどのようなものがあるか知っていますか?

- ・生徒指導, 教務部, 進路指導, 学年担任, 教科担任
- ・校長がすべての教師を統括する
- ・担任教師は学級運営, 保健主事は生徒の健康管理をする

②学校行事, 特別活動のねらいと内容を知っていますか?

- ・教室内では分からない主体性や自主性を育てるとともに社会の勉強をする
- ・社会性, 協調性を育てるため, クラブ活動, 生徒会などがある
- ・団体生活の規律を教えるとともに学校生活のめりはりをつける
- ・地域社会とのコミュニケーション
- ・ホームルーム活動, クラブ活動, 生徒会活動
- ・修学旅行, 遠足, 健康診断, 学園祭, 入学式, 卒業式, 合唱コンクール, 学校行事等
- ・学校行事 (体育祭, 文化祭など) はクラスが団結して行う
- ・生徒間の交流を深め, 仲良くなる場
- ・望ましい集団活動を通して, 心身の調和の取れた発達と個性の伸長を図り, 自己を生かす能力を養う

③ホームルーム担任のしごとの内容を知っていますか?

- ・学級運営を中心とし個々にあった進路指導を行ったりする
- ・生徒一人一人の性格や能力を把握し一人一人に応じた指導ができるようにしておく
- ・生徒の家のこと心身のことを把握
- ・生徒の心身の健康状況, 自発的な行動の評価
- ・道徳教育
- ・進路指導を行ったり, 係, 役割などを与えて生徒の責任感を育てる
- ・学級をまとめ, すべての生徒が楽しく学校生活を送ることができるように生徒とともに考え行動する
- ・生徒の学校内外の生活態度を管理する
- ・一番大切なのは生徒の命を守ること

④学校保健のねらいと内容を知っていますか？

- ・健康、衛生面での管理ができるようにする
- ・生徒、教師が安全で健康な生活が送れるようにすること
- ・主に社会における諸問題、衛生について健康の維持増進のための知識を教授する
- ・個人及び集団の健康増進の保持その手段を学ぶため
- ・生徒の健康管理や学校の衛生面での管理をし、学習に適した場所を作る
- ・生徒の学校生活の衛生、健康を守る
- ・事故が起こった場合早急に対処する
- ・健康の保持増進、体力の向上

資料3

⑤教育現場（学校）について、どういう思いがありますか？

- ・週休2日制などによる学校のスリム化に伴う保健体育科の存在意義が問われていると思う。（授業時間の減少など）
- ・あまりにも複雑で難しい問題を抱えていて現場は大変だと思う。問題が学校だけに起因するものではなく地域家庭との問題、さらには、社会、時代との問題も複雑に絡み合っていて難しいと思う。
- ・少子化に向けて学校全体が大変な時期に向かっているのだからそれに向けての対策で大変だと思う
- ・いじめ、自殺、登校拒否などさまざまな問題が浮き彫りにされているが、それに対応する教師の立場の難しさを感じている
- ・今の学校は生徒に弱すぎると言うイメージがあり、生徒の機嫌を伺っているようだ
- ・校風、しきたりに縛られている部分が多いと思う
- ・学校自体には行きにくいという思いがあるけど、行けば楽しいところだと思う
- ・家庭、社会、学校という教育現場の一つとして自分により経験と知識を与えてくれる場
- ・さまざまな面において社会からは保護される特殊な存在。社会人として生活して行く上での選択の幅を広げたり、集団生活を通して社会に出て人と接するときの基盤を作るところ
- ・高校卒業してから現在までの情報は皆無に近い（大学で現場の話をする先生もいない）
- ・指導内容も大切だがそれ以外の生徒とのコミュニケーションを行うことが重要だと思う
- ・生徒にどう理解してもらおうか難しい反面、ともに分かり合えた時の喜びや楽しさを味わえ、生徒から学ぶことがたくさんある
- ・生徒が「学校に行きたい」と思えるような学校が理想です。・生徒の能力を伸ばす、見つけだす
- ・学校によって違いが大きく自分が教師をしてもやりやすい学校もあるしいやな学校もあるだろう。
- ・教師の思いと生徒の期待のギャップ
- ・堅いイメージ

資料4

IV. 教育実習自体について

①教育実習で何を学びたいですか？

- ・生徒との信頼関係の作り方や生徒一人一人をどう理解して行けば良いのか
- ・指導案作成方法、授業の展開方法
- ・実際に生徒に教えることの難しさ
- ・指導者としての表現の仕方
- ・現場の実態
- ・それぞれの種目の指導技術と各学年による反応の違いを学びたい
- ・たくさんの人と向き合うことで自分や自分の年代とは違った考え方や反応があるのか、教師という立場にあるときにどんな知識や能力が必要なのか
- ・うまく行かないことは分かっているが積極的にトライする
- ・最後の授業までには全体が見れるくらいの余裕を見につけたい

②教育実習に何を期待していますか？

- ・生徒と触れ合う楽しさを感じたい
- ・楽しい意味ある授業ができるようになりたい
- ・教師として生徒を指導していくための力をつけること
- ・授業で生徒が理解し、反応してくれること
- ・実際の現場を肌で体験する
- ・生徒達が動く喜びを知ってくれること
- ・自分の伝えたいことをうまく伝えることができるか。その能力が自分にどのくらいあるかを知ること
- ・教師という立場に慣れるための工夫、努力をしたい
- ・新しい自分
- ・自分を認めてもらうこと
- ・授業は少ないがすこしでも授業を行うまでのプロセスの多さを学びたい
- ・自分が教師になりたいとさらに熱くさせてもらうなにか
- ・教師にならなくても自分の仕事に生かせるものを見つけない
- ・ふだんの生活とは掛け離れた生活からくる緊張感、充実感

③不安なことがありますか

- ・学校での行動すべてにおいて不安である
- ・生徒が自分の話をちゃんと聞いてくれるか、生徒が反応してくれるか

- ・授業が円滑に進められるか
- ・生徒とのコミュニケーション（多種多様な生徒がいると聞いている）
- ・自分の考えが生徒に伝わるかどうか
- ・指導案がうまくかけるか、生徒の興味を引けるか、眠る時間があるのか
- ・授業が事故もなく終わってくれるか

資料5

I. 教師のための基礎能力に関して

②大学のカリキュラムで、今までにどんなことを学んでおけばよかったと思いますか？

（どんな講義・演習などがあればよかったと思いますか）

- ・保健の分野に関すること（保健教育学的なこと）
- ・実技全般理論
- ・生徒の発達段階に応じた心理、関わり方
- ・中高の保健の授業を実際に受けたい
- ・実際に中高（保健、体育）のVTRなどを見て生徒の反応などを確かめ、具体的に考えることができる講義
- ・個々の種目における指導法
- ・運動の技術分析とそれを生徒に伝える方法
- ・生徒への発問、投げかけの仕方
- ・同和教育、障害児教育など差別に関する事項

③大学のカリキュラム以外に、自分で何を身につけておけばよかったと思いますか？

- ・生徒とのコミュニケーション能力
- ・実践的指導力
- ・保健分野の知識（人体の医学的知識や公害についての細かい内容）
- ・各種の運動技能の分析力と指導のポイントの把握
- ・幅広い知識
- ・自分の考えを人に簡潔に伝える能力
- ・パソコン、ワープロをもっと上手に使えるように
- ・中高生の実態

資料6

II. 教育実習自体について

①どんなことが大変でしたか

- ・指導案の作成、授業で何を教えるか、どう教えればよいか考えること
- ・勉強不足だったため教材研究の時間が足りず、苦労した
- ・指導案どおりに授業を進めて行くこと
- ・通学、朝早く起きること
- ・授業数が多く1つの指導案が不十分のまま次の指導案に取り組みなければならなかった
- ・分かりやすく教えるための指導方法
- ・授業で生徒の動きを見る
- ・実技で示範すること
- ・生徒の名前を覚えること
- ・生徒とのコミュニケーション
- ・生徒に自発的に行動させる授業づくり
- ・宿舍が遠く指導案に集中できないときがあった
- ・これから行う練習の方法の説明に苦労した
- ・予想もしない反応への答え方
- ・睡眠時間が少ない

②教育実習でよかったこと、充実していたことは何ですか

- ・生徒とコミュニケーションがとれたこと
- ・教職の難しさ、苦労が分かったこと
- ・生徒が自分の注意したことを守りゲームをやってくれたこと
- ・生徒から「がんばって」と励まされたこと
- ・指導案を作ることによって、実技種目の基本を学んだ
- ・生徒指導のこつをつかめた
- ・必死になって指導案を書き、授業をして反省し、次の授業につないでいくことがよかった
- ・大学に入学して初めて教育学部に入ったんだなあと実感したこと
- ・指導教官の熱心な指導がとてもありがたかった
- ・一日がとても充実しているように思えたこと、目的を持って2週間過ごすことができた
- ・やりとげたこと
- ・宿舍の快適な住み心地と食事
- ・指導するための工夫をいろいろ考えられた
- ・教生どうしの連帯感
- ・授業の中で生徒の技術が向上したこと
- ・生徒の笑顔がかえってくること
- ・指導案が一応毎回仕上がったこと
- ・自分で少し考える力がついた
- ・規則正しい生活を送れたこと

③教育実習を通して何を考えましたか？

- ・自分の将来
- ・今後の人生を生きて行くことに通ずる面が数多くあったこと
- ・自分の言動の重要性
- ・教員としての適性
- ・教材観とは？授業、教師とは
- ・なぜこれをさせるのか、必要なかという裏付け理論

- ・授業展開の難しさ
- ・計画を立て、積極的にトライすること
- ・先生という職業の難しさと大変さ
- ・人に教える楽しさ難しさ、日々勉強することが必要だ
- ・体育では、技術のポイントの説明や技術を向上させるための生徒へのアドバイスの仕方が難しいと感じた
- ・保健の授業の重要性を実感するとともに、より慎重な態度で望まなければならないと感じた
- ・大学で免許は取れるが、本当に中身のある勉強をしてきたのだろうか
- ・もっと早くから教育実習をしていれば教員を真剣に目指していたらという事
- ・人に教えることの難しさ
- ・コミュニケーション、人間関係
- ・もっと勉強していかないといけない
- ・生徒の立場に立って考えることが大切

資料 7

④実習を終えた今、実習前の考え方と変わったことはどのようなことですか？

- ・体育に限らず授業、学校、教職に関する価値観
- ・教師という職の大変さ
- ・まだよく把握できていない
- ・自分の考えを人に伝えることの難しさ
- ・経験だけではいい教師になれないということ
- ・保健の授業の難しさと重要性を痛感した
- ・教材を教えれば良いのではなく、集合の場所なども考慮しなければならない
- ・少しは教壇に立てるという自信がついた
- ・生徒の立場で考えるようになった
- ・教材研究の大切さ
- ・授業の重み、授業を行う難しさ
- ・自分の言動の重要性
- ・体育、保健などの知識、技能すべてが足りないと気づいた
- ・人間性を向上させなければならないと思った

⑤教師として活躍するためには、何が必要だと思いましたか？

- ・生徒をひきつける授業または能力
- ・技術力、想像力の豊かさ
- ・バイタリティーと教材研究
- ・幅広い知識と人としての常識の深さ
- ・教えることの難しさが分かったのでうまく表現する力
- ・専門的知識、技能
- ・広い心、優しさ、大きな心
- ・責任感と使命感、向上心
- ・生徒との信頼関係
- ・生徒が何を考え、どうしたいのかを知る能力
- ・授業や生徒への情熱とあくなき研究心
- ・生徒理解とより多くの知識
- ・生徒の立場で考えること
- ・本当にやりたいという気持ち
- ・情熱、信念
- ・適当に済ませてしまおうという考えを無くすこと

⑥教育実習は、あなたにとってどんな意味のあるものでしたか？

- ・人に自分の考えを伝えることの難しさを知り、大変勉強になった
- ・教職にはつかないがこの経験を生かせる時が来ると思う
- ・教師を志すとき何が足りないのか、自分の無知、未熟さを感じさせてくれた
- ・自己の表現力を身につけることができると思った
- ・保健の重大さを知った
- ・人の動かし方が学べた
- ・将来についての考えがまとまってきた
- ・人間形成を培ううえでの重要な局面に立てたことはすごい責任を感じるものだった
- ・人に何かを伝えること、全体を見通して今何をすべきか考えることの重要性
- ・現場が自分の想像と違っていたことを少し残念に思うが、経験を積んで立派な教師になりたいと思う
- ・精神的にもしんどかったけどその分考えさせられることも多く（特に批評会）充実感がある。
- ・視野を広げる
- ・教師の難しさ授業の難しさを知った
- ・考えることができ楽しかった
- ・これから先のどんな困難にも耐えられる
- ・教職に就くという気持ちを固めた

資料 8

⑦実習期間、時期、授業数、内容、グループの人数等について何かありますか？

- ・実習期間がもう少し長くあり、授業も増えればまだ向上することができたと思う
- ・生徒とのコミュニケーションを取ることが許されていない状況に納得がいかない。何のための教育実習なのか改善してほしい
- ・保健の授業数を増やすべきだと思う
- ・期間の割りに授業数が多いと思う（授業の準備にかなりの時間を費やす）
- ・同じ内容の授業を別のクラスでやりたかった
- ・研究授業は教員志望者がやれば良いのではないかと
- ・5人が1人の先生につくのは担当の先生がきつそう
- ・授業数、期間ともにこれ以上増えることは考えたくない

資料9

III. 残りの大学生活をどのように過ごしたいと思っていますか？

- ・いろいろな分野の本をたくさん読み、いろいろな事を経験し、自分自身を高めていきたい
- ・教師に必要な能力をつけていきたい
- ・保健体育における知識を学ぶことと指導技術を身につける
- ・教育をもう一度考え直し、自分なりの教育観を確立し、少しでも人間性を高めることができるように努力したい

資料10

VI. 教職に就くことについて

①今、教師になりたいと思っていますか？

思う	5	4	3	2	1	思わない
人数	4	3	6	1	5	人数

②それ、なぜですか？

〈5と答えたもの〉

- ・実習前は教師のイメージがわからなかったが現場で教師の苦しさ、楽しさというものが実感でき教師という職業が自分の中ではっきりしたものになったから
- ・今回の実習で生徒と触れ合うことの楽しさや共に学ぶことの楽しさを知ったから
- ・ずっとそう思っている

〈4と答えたもの〉

- ・以前からなりたいたって自分にあっている
- ・やっぱり教師がいい。実習は大変だったけど教えることは自分にあっていると思う
- ・力不足な点が一杯あるけど人と関わることのできる職だと思うし、楽そうではないけれど、得るものがあると感じたので

〈3と答えたもの〉

- ・一度社会に出て自分を見つめてみたい
- ・社会全体という広い価値観の方にひかれた
- ・実習中に本当にこれでいいのかと思ったので
- ・はっきりとは分からない
- ・実習前はもっと教師になりたいと思っていたが、授業の難しさと自分の技量のなさを痛感し少し自信がなくなった

〈2と答えたもの〉

- ・何十人何百人という生徒にエネルギーを注ぎ込むのがあまりにも大変だから

〈1と答えたもの〉

- ・内定している
- ・教職を希望していない
- ・他にやりたいことがある

資料11

V. その他、何かあれば自由に書いてください。

- ・生徒とのコミュニケーションをとりたい
- ・教える立場に立ったとき教師の大変さを実感した。他人に物事を教えるのは非常に困難だと思っている
- ・小さなころからあこがれていた職業だったが理想と現実が掛け離れていた
- ・宿泊施設があるので教育実習に集中できると思った。通わなくていい
- ・寮生活は連帯感があると先輩から聞いていた

資料12

II. 教師のための基礎能力に関して

①教育実習を受けるに当たり、次の項目について準備は十分ですか？

ー実習前ー

ア 体育理論

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	1	6	7	9	2	人数

イ 保健理論

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	3	8	11	3	人数

ー実習後ー

ア 体育理論

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	2	3	10	4	人数

イ 保健理論

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	0	3	12	4	人数

ウ 実技技能

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	2	11	12	0	0	人数

エ 指導技術

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	2	7	9	7	人数

オ 生徒とのコミュニケーション能力

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	3	17	4	1	人数

カ 生徒の掌握能力

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	3	9	11	2	人数

キ 運動技術の師範

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	3	16	6	0	人数

ク 教育機器の使用

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	4	11	7	3	人数

ウ 実技技能

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	8	6	3	2	人数

エ 指導技術

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	1	4	9	5	人数

オ 生徒とのコミュニケーション能力

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	5	6	5	3	人数

カ 生徒の掌握能力

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	3	7	7	2	人数

キ 運動技術の師範

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	6	6	6	1	人数

ク 教育機器の使用

十分	5	4	3	2	1	不十分
人数	0	2	7	6	4	人数

資料13

①教職に就くことを期待して、大学に入学しましたか？

した	5	4	3	2	1	しない
人数	7	8	3	4	3	人数

②実習を終えた今、教師になりたいと思っていますか？

思う	5	4	3	2	1	思わない
人数	4	3	6	1	5	人数

②実習をこれから行う今、教師になりたいと思っていますか？

思う	5	4	3	2	1	思わない
人数	7	4	4	5	5	人数

IV. 結果と考察

1) 実習生が大学に期待していたものは何か。

ここでは、①教職に就くことを期待して、大学に入学したか、②今の教育学部に満足してるか、という点で質問した。

①については、教職志望者の割合が、15人と多かったが、期待していなかったという答えも7人いた。教員養成だけが目的でない今の大学のシステムとしては、いたしかたのないことかもしれないが、少しでも入学後に志望者の割合が高くなれば、教育実習の意味は大きいと考える。今回の調査では、前後のアンケート調査の回答数が違った事もあり、志望者の数は増えているとは言えないが、実習を通して自分を深く見つめ直すということは十分できたと言える。②について、「実技・実習が多い」「授業内容が幅広い」「学習環境が整っている」などの環境面や、「教師になるための実践的授業が少ない」など、指導方法的な講義を求める回答が大変多かったが、「他人が何かしてくれる」という受け身の感覚から、「自分の在り方を考えた」ということができたということに変化したということは、大変意義深いものであると言えよう。

2) 教師のための基礎能力はどのようなものと考えているのか、それは十分に準備できていたか。

教育実習を受けるに当たり、(ア) 体育理論、(イ) 保健理論、(エ) 指導技術、(カ) 生徒の掌握能力、(オ) 生徒とのコミュニケーション、(キ) 運動技術の示範、(ク) 教育機器の使用、について事前の準備は十分であったか、ということ、実習前後で比較してみた。全般的に、十分であるという自信は余りなかったと言えるが、(ウ) の実技技能については、ある程度自信をもって臨み、実習後の感覚としても満足度の高いものであったようである。大学のカリキュラムで、実技の多さに満足している内容とも関連している。しかし、実習を通して自分の諸準備の不十分さを改めて感じたという傾向が強い。実習が自分自身を見つめる一つの起爆剤になるのは間違いないが、それをより有効にするためにも、学生生活の中で、もっと幅広い知識や教養・体験といったものをより積極的に身につけておく必要性を強く感じる。

3) 学校教育についての認識はどのようなものか。

①校務分掌にはどのようなものがあるか、②学校行事、特別活動のねらいと内容、③ホームルーム担任の

仕事の内容、④学校保健のねらいと内容、について尋ねたが、全体を通してみると、彼らが経験してきたものから培った認識であり、まだまだ捉え方が浅く不十分である。

例えば特別活動については、学習指導要領にまとめられているように、特別活動は各教科とともに学校教育における2本柱の一つとして大きな意味をもっており、その重要性に応じた目的・内容が定められているにもかかわらず、生徒をどのように育てるのかという観点に対する認識が薄く、単に項目の羅列に終わってしまっている。また、担任の仕事内容についても、教育基本法にうたわれているように、「人格の完成を目指し」た教育が行われるためには、担任が重要な位置にあるという認識にたった回答は少なかった。学校についての思いについて見ると、「集団生活を通し、社会生活に必要な基盤を作るところ」、という意見に代表されるように学校の役割を見ているものと、週休2日制をめぐる問題、保健体育科の存在意義が問われている現状、学校を取り巻く状況、学校が抱える問題、少子化等々、教育現場(学校)をめぐるさまざまな問題に注目しているものと大別された。このことから、教育を取り巻く日々の社会状況の動きを、問題意識をもって積極的に把握しようとしている実習生と、受け身的に生活している実習生との差は大きい。日々の生活の中でもっと問題意識をもって物事を見つめる視点を養ってほしいと感じる。

4) 実習を通して何を考え、実習自体をどのように評価しているか。

実習前に、①教育実習で何を学びたいか、と問いかけたことに対しては、「指導の仕方」、「子どもたちの感覚、考え方」など、指導技術や子どもたちの実態・反応を学びたいという回答が多かった。また、②教育実習に何を期待するか、ということに関しては、「自分の伝えたいことをうまく伝えることができるか。」のような力だめし的な期待と、「生徒と触れ合う楽しさを感じたい」のように、生徒とのコミュニケーションを期待するものや指導力を身につけたいという期待が大きかった。しかし、③不安なことは何か、という問いかけに、「生徒とのコミュニケーション」という言葉に代表されるように、生徒とのやり取りや指導、「授業が円滑に進められるか、事故もなく終わってくれるか」というものが多かった。中には、「すべてが不安」といった回答もあり、教育実習に対する期待と不安はどちらも大きいようである。

実習後には、④大変だったこと、よかったこと、充実していたこと、などをまず聞いてみたが、「指導案

作り」や「教材研究」などの、授業前の準備の大変さを強く感じたようである。また、授業中も、「指導案どおりに授業を進めて行くこと」「これから行う練習の方法の説明」「予想もしない反応への答え方」などに戸惑ったようであるが、「授業の中で生徒の技術が向上したこと」など、授業を通して喜びもまた感じたのも事実である。

「指導案」については、様々な回答があるが、指導案を作ることを通して、己の力不足や身につけるべきものを感じ取り、教師として必要なものは何かということ深く掘り起こすためのきっかけとなっているようである。指導する側としても、事前のオリエンテーションから指導案の作成には力を入れるが、きちんとした指導案が書けるかどうかということは、単に授業の計画を立てるというレベルの問題ではない。教師の考え方や指導能力そのものを現すものであり、実習における指導案作りというものは、とても大きな意味もっている。従来以上に、指導案作りの指導には、時間をかける必要があると言える。

教育実習を通して、「人に教えることの難しさと楽しさ」を多くの実習生が感じ、「教員としての適性」や「自分の将来」について真剣に考え、残りの大学生活において、知識・教養や経験の修得のみならず、「教師に必要な能力をつけていきたい」「教育というものをもう一度考え直すとともに自分なりの教育観を確立しなければならない」と思っている。そして、「少しでも人間性を高めることができるように努力したい」などという回答を見ると、実習に対して責任の重さを感じる。

実習を通して教職に就くことをより強く願うようになった者、厳しさを感じるようになった者、自分には向かないと考えるようになった者等、様々であるが自分自身を深く見つめることになったということは間違いなく、指導技術以上の内面的な変化が得られたと思われる。

「期間をもっと長く授業も増えればまだ向上する」「保健の授業数を増やすべきだと思う」など、実習期間等に対しても積極的な意見が多かったが、「生徒との関わりが少ない。改善してほしい。」といった意見等には、「教育実習においても生徒指導の充実を」という中教審答申の声などにも答えるよう改善する余地がある。

V. まとめ

我が校では、毎年200人以上の教育実習生を受け入れ、未来を生きる子どもたちを育成することのできる教師を育てようとしている。幅広い視野で子どもたちをとらえ、子どもたちの個性を尊重し、かつ、教育者

として使命感をもちながら、自らも向上しようとする教師である。しかしながら、近年の実習状況、今回の教育実習に対する学生の意識調査をみると、さまざまな面で認識を変えていかなければならない。

ほとんどの実習生は教育実習に大きな期待をよせながらも、実習生自身の回答にもあったように、実際にはさまざまな面において、不十分な状態で実習に臨んでいる。事前にどんな準備が必要なのか、具体的に何を学びたいのか、教師として生徒とコミュニケーションをとるには、何が大切なのか、などの視点は薄く、また、学校についての認識も過去の経験に基づくものであり、漠然とした状態で実習に臨んでいる。そして、実習に入り教育実習に対する自分の認識の甘さに気づくが、日々の授業に追われ、認識不足を反省しつつ教育実習は終わってしまう、という状態ではないだろうか。我々は、こういう現状を深刻に受け止め、事前の講義を行い、教育実習に必要な材料を提供したり、どのような気持ちで望んでほしいか等を具体的に説明したが、現状を脱し切れていない。何を改善しなければならないのか。

1つは、実習生の回答にもあったように、大学のカリキュラムの中に教職に関わる内容を組み込み、授業を組み立て、実践していくための方策の土台となるような講義が必要ではないか。指導される側ではなく、指導する側での理論、実践を学習していく必要がある。また、教養審答申でとりあげられている「選択履修方式の導入」について、最小限必要な資質能力を確実に身につけさせ、さらに、積極的に得意分野づくりや個性の伸長を進めるとあるが、教育実習生を指導した感触では、重要な分野も選択によって置き去りにされているように思われる。「講義内容を幅広く選択できる」ではなく、「幅広く必修できる」ことが必要ではないか。受け入れる大学の体制によっては、学生が、生徒の学習する内容を経験しないで教職に就くことが起こり得る。受け身的なことでは困るが、学生の実態を考えると選択履修方式のあり方も検討していかなければならない。

次に、教育実習期間の延長についてである。教養審答申でとりあげられているが、教育実習の延長を求める回答があった。実際、2週間という短い期間では、授業をこなしていくのが精一杯で、教材研究も追いつかないまま授業に望むことがあるようである。この期間で、学級経営、生徒指導、教育相談、進路指導、道徳、特別活動部活動などの実習をすることは不可能である。しかしながら、ただ期間を延長すれば解決する訳でもなく、受け入れる学校の体制も考慮したうえで、学生がゆとりをもって幅広い実習が行えるように検討

する必要がある。

学生は、教師に必要な資質能力について教養審答申でもとりあげられている「豊かな人間性」をあげている。先に上げたように学生は2週間という実習を、日々授業に追われながら、しかし、その忙しい中で自らを振り返り、課題を見つけ、チャレンジし続ける。実習中に人間として、指導者として考え、悩む中で得るのは大きいといえる。しかしながら、この短期間に「豊かな人間性」を培うことは難しい。日々の生活の中で、さまざまな経験を通して、幅広い視野で問題意識をもち、活動することができるような学生を育てなければならない。それには、大学のカリキュラムにおいて教職意識の高揚を図るとともに、教育実習において指導能力をつけ、教師の指導範囲、指導能力の必要性を認識させなければならない。少なくとも学校教育のねらいと内容は十分に認識させなければならない。

VI. 今後の課題

今回の調査で、明らかになった部分も多いが、課題も残した。

まず、調査の対象数が少なかったということが挙げられる。実習前調査が28名であったし、実習後調査では19名と減少してしまい、実習前後の比較が難しく、教職に対する学生の意識の変化についての考察が不確実な面もある。次に、教職に就いた人の教育実習に対する意見を聞くなど、対象者の範囲を広げることも検討したい。さらに、母集団全体の変化ばかりでなく、同一人の実習前後での変化が探れるような方法も必要と考える。また、これらを具体的に引き出すための質問項目にも、工夫を加える必要があると思う。

冒頭にも述べたように、学校教育を取り巻く環境には厳しいものがある。そのような状況の中で、未来を担うたくましい子どもたちを育てる教師の育成をどのように考えるのか。大学と附属中学校・高校の連携を密にしながら、より良いものをつくりあげたい。

【参考文献】

- 1) 池田秀男ほか
学生から見た教育実習の現状と問題点
—教育実習に関する調査研究報告書—
第1号～第5号, 1978. 1～1978. 3
- 2) 中教審第1次・第2次答申, 1996
- 3) 教育職員養成審議会第1次答申
—新たな時代に向けた教員養成の改善方策について—, 1997
- 4) 蓮見音彦ほか
教育大学・教育学部学生の教職への意識と意見

中間報告, 1993. 11.